

# 障害ある人ない人

## 一緒に語るううよ

### 車いす女性 自宅でステイ

「障害があっても、地域で自分らしく生きられると知ってほしい」。体の骨がもろい先天性骨形成不全症の女性が、親子で暮らす自宅を、障害のある人とない人の交流拠点にしようと、宿泊希望者を募っている。精神障害の体験をオープンにし、自宅を開放する女性もいる。障害者自立支援法案が今国会に提出され、障害者の地域生活のあり方が注目されている。地域での暮らしに何が必要か、まずは実態に接して欲しいとの願いが込められた試みだ。(佐藤実千秋、清川卓史)



交流を呼びかけているのは、東京都国立市に住む車いすのカウンセラー安積遊歩さん(49)。20代で渡米、障害者の自立生活運動を学び、日本で広めた先駆者の一人だ。講演などで「一生に1人でいいから障

害のある人と友達になってください」と語りかけてきた。「ただ単に会うだけでは、障害とともに地域で生きる喜びもしんどさも伝わらない」と思うからだ。

それに応えるように、育児に悩む主婦や不登校の若

者が家を訪ねてくるのがあった。自分の体験をもっと語り合いたい。そんな気持ちも強まった。

ホームステイは、都市住民が農村で交流するB&B方式(朝食つき)の一般家庭での宿泊)を、障害者と健常者の間で応用した。NPO法人北海道B&B協会の「北海道外ホスト」として正式登録している。

自宅は一橋大学にほど近い木造2階建て住宅。これまで福祉系の大学教員、障害のある母親とその子どもなど6組が宿泊した。「ウチの玄米ごはんはおいしい

障害者自立支援法案 現行制度では、障害者が受けられるホームヘルプなどのサービスは、身体・知的・精神といった障害別に格差がある。これをひとつにまとめ、この障害でも利用できるようにする。また、増加する費用をまかなうため、サービス利用料の1割を自己負担とし、施設入所者も食費を原則自己負担とする。低所得者の減免の範囲などが論点だ。

### キーワード

17歳年下の石丸偉丈さんと出会った。理解ある医師に支えられ、40歳で出産。生まれた長女の宇宙ちゃん(8)は安積さんと同じ障害があった。

「車いすの私が好き」。歴史好きで織田信長のファンという宇宙ちゃんは、昨秋から小学校に行かなくなり、夫が運営するフリースクールで学ぶ。親として一時悩んだが、いまは不登

38歳のとき、障害がない

訪問講座料として1人2千円。問い合わせは安積さん(FAx042・574・7127)。メールhide take0821@yb.ne.jp(まひ)。

です。後片づけは手伝ってね、とお願いするんです。そんな会話をきくたびに、双方の距離は徐々に縮まっていく。

「車いすの私が好き」。歴史好きで織田信長のファンという宇宙ちゃんは、昨秋から小学校に行かなくなり、夫が運営するフリースクールで学ぶ。親として一時悩んだが、いまは不登

38歳のとき、障害がない

## 客間を開放 相談の拠点に

横浜市南区の商店街から30ほど奥に入った築50年



●自宅で電話相談にも応じる広田和子さん  
●横浜市内で左から安積遊歩さん、娘の宇宙ちゃん、夫の石丸偉丈さん  
●東京都国立市で

近い一軒家が、広田和子さん(58)の自宅。きしむ玄関の横の4畳半が「客間」で、布団が2組常備されている。精神障害の当事者の広田さんを、他の当事者や会社員、学生たちが訪ねてくる。昨年未まで、妄想がある70代の女性が半年間泊まっていた。

「医者にかかっているくても、みんな社会の中で生きにくさを抱えている。相談相手がない人に、私でよければ話に来て、と言っているんです」

こたつを挟んだり、近所の店で鍋を囲んだりして、夜まで普通に向き合う。費用は割り勘。十数年前に一軒家を借りてから、自然といまのスタイルになった。

83年に出社拒否が原因で精神科にかかり、閉鎖病棟に入院した。名刺には「遅

れた精神医療の世界から社会に戻って来た」という思いを込め「精神医療サバイバー」という肩書を記す。

入院治療が必要ないので地域の受け皿がないため退院できない状況を変えたいと思う。それには24時間いつでも安心して相談したり、駆け込んだりできる体制も必要だ。様々な団体でカウンセリングを担当するほか、自宅でも相談に乗るのは、生活保護で暮らすサバイバーとして、社会貢献の意味がある。

いまでも多量の薬を飲まないで眠れないが、隣組の組長も務めた。「昼まで起きられない私のような人間でも、所得と住宅をその人の生活状況に合わせて保障する制度や、近所の人の理解があれば、地域で自分らしく生きられる」

当事者もまわりの人も、それを知ってほしいと思う。